

木材製品の環境的・文化的価値 < 共同研究 : 国立民族学博物館所蔵木製品標本資料にもとづく森林資源利用史の研究 : 桶と樽に着目して >

著者	落合 雪野
雑誌名	民博通信 Online
巻	171
ページ	20-21
発行年	2023-03-31
URL	http://doi.org/10.15021/00010020

木材製品の環境的・文化的価値

落合 雪野

本研究は、国立民族学博物館（以下、民博）に所蔵された木材製標本資料のうち、日本各地の桶と樽を対象にその素材の樹種を非破壊分析によって同定し、その成果をもとに木材供給地の森林におこった歴史的イベントについて考察しようとするものである。本稿では、その概要について紹介する。

木材製標本資料を分析する

民博所蔵の標本資料には、木材で作られた多種多様なモノが存在する。しかし、その素材である樹木の種（樹種）に関する情報はきわめて少ない。だが、素材の樹種が特定できれば、その供給地の植生の特性や木材供給の変遷に関するデータが得られ、森林から樹木、木材、モノまでのプロセスを検討することができる。標本資料は何の木でできているのか、このストレートな疑問が本研究の出発点にある。

ところが、ここで2つの課題が出てくる。最初の課題は、民博の標本資料はそのすべてが学術的に貴重なコレクションであり、樹種同定の作業にあたって破損してはならないという点である。

そこで本研究では、文化財科学と森林科学の研究者が協力し、樹種同定のために、非破壊分析の手法の開発に取り組むことにした。具体的には、民博の共同利用型科学分析室に備え付けられているX線透視CTスキャン装置やデジタルマイクロスコープなどの機器を用いて、標本資料の木材の材質や断面組織の特徴などを明らかにし、既知の樹種サンプルと比較する予定である。

この作業の過程では、標本資料に関して、素材、形状、構造などの形態的特徴に関するデータが得られる。このような

知見をドキュメンテーションに反映させることで、民博のコレクション全体の価値が高まると考えられる。また、非破壊分析による樹種同定の手法は、博物館などに所蔵される木材製品標本資料に広く応用することができ、文化財の保存や活用への貢献が期待できる。

日本列島の桶と樽に着目する

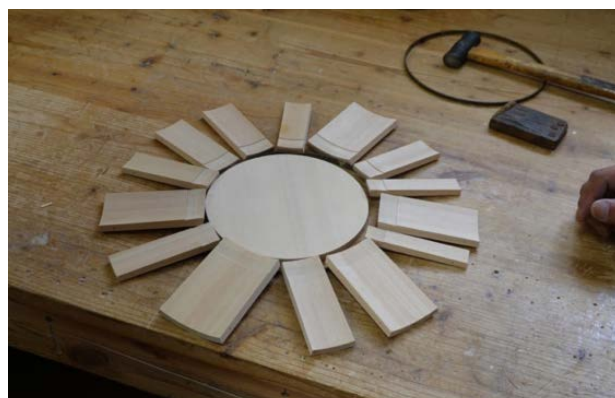
つぎの課題は、民博に所蔵された膨大な数の木材製標本資料のうち、どの地域のいかなるモノを対象に研究するかという点である。これについて本研究では、収蔵庫であらかじめ標本資料を観察して検討した結果、日本列島各地で製造された桶と樽を対象を絞ることにした。

桶と樽は液体を溜めたり、運んだりするための木材製の道具である。日本では近世から近代にかけて、家事や沐浴などの日々の生活の場面や、農業、漁業、食品産業、工芸などの現場で幅広く活用されてきた（石村 1997; 小泉 2000）。民博の標本目録データベースを調べてみると、その状況を反映して、桶441点、樽257点もの標本資料が所蔵されていることが確認できた。

森林科学の分野では、日本列島各地の多様な樹種や植生に関する詳細な情報がすでに蓄積されている。また、『木材ノ工藝的利用』（農商務省山林局、1912年）などの文献資料をもとに、木材製品の用途や加工法と樹種の対応関係に関する情報を収集することができる。本研究では、民博の標本資料から得られたデータを、このような既知の情報と対応させることにより、森林生態と森林資源の活用のあり方について検討する。さらに、素材の生産に携わる林業者が森林育成と木材



樹種同定の手法開発にむけての検討（2021年11月19日、民博共同利用型科学分析室、筆者撮影）



桶を構成する木材のパーツ（2022年8月4日、滋賀県大津市中川木工芸比良工房、筆者撮影）

落合 雪野（おちあい ゆきの）

龍谷大学農学部食料農業システム学科教授。専門は民族植物学、東南アジア研究、食文化研究。編著書に『ものづくりの植物誌—東南アジア大陸部から』（臨川書店 2014年）、『国境と少数民族』（めこん 2014年）、『ラオス農山村地域研究』（めこん 2008年）などがある。

加工の実態や課題について報告する機会を設けると同時に、奈良県吉野地区を訪問してパーツとなる樽丸の製作現場を観察するなど、現在の実態に関する調査も予定している。

桶や樽を製作する場合には、建築材のような大きな木材を必要としない。むしろ、木材を小さく割ってから再構成するという手法で製作されること、パーツを置き換えることで半永久的に使用できることに特色がある。このような着眼点から、森林が有する生態系サービスの意義や、小さく割ってから再構成するという資源節約的な木材利用のあり方を再評価したい。

研究者と実務家が対話する

最後に本研究では、日本列島各地の桶や樽を、誰が、いかなる目的で、どのように作り、つけてきたのかについて、その当事者の側からもアプローチする計画である。

具体的には、民族植物学や文化人類学、民俗学、考古学などの研究者が、考古資料や歴史史料、民族誌の記述、フィールドワークなどに基づいて、農業、漁業、食品産業、工芸、生活、儀礼などにおける桶や樽の多様な用途を精査するとともに、その歴史的変化のありさまを把握していく。

さらに、本研究には、桶や樽の製作に携わる技術者や、桶や樽を産業利用している発酵醸造業者などが参加する。桶や樽の製造者は、用途に応じて選択する木材の特性やその変化、製作方法や技術継承に関わる実態や課題などについて報告する。また、桶や樽を利用している日本酒、醤油、フナズシな

どの発酵醸造業者は、必要とする桶や樽の特徴やその利用の実態、金属やプラスチックの容器では代替し得ない桶や樽の機能について解説する。

最近では食品産業の分野や食文化に関連して、桶や樽の製作者や利用者が減少したことから、「本物の味」の継承が危ぶまれている。たとえば、発酵調味料の醤油については、木桶仕込みの醤油が絶滅寸前になったことを受け、その維持拡大を目指すプロジェクトが進行しつつある（松本 2021）。本研究において、研究者と実務家との対話をもとに得られる学術的な成果を社会に還元し、桶や樽にかかわる技術や文化を次世代に継承しようとする種々の活動の支援につなげたい。

人と森林のサステナビリティを展望する

ここまでみてきたように、本研究には文化財科学、森林科学、民族植物学、文化人類学、民俗学、考古学などの分野の研究者13名と実務家4名が共同研究者として参加し、領域横断型の研究を展開する。その独創性は、①民博所蔵の標本資料に起点をおく点、②素材である樹木の多様性に着目し、その供給地の森林までを範囲に議論する点、③森林から樹木、木材、モノまでのつながりのあり方を再検討しようとする点にある。このような研究活動によって、木材がモノとしての機能や用途を備えて適材適所に活用されるプロセスの特質を把握することを目指す。

桶と樽は、生活や生業、産業に深く結びついた道具であると同時に、人類史における木の重要性が検証され（エノス 2021）、プラスチック・フリーへの取り組みが進む現在、改めて評価すべき存在でもある。本研究を通じて、桶や樽に代表される木材製品をつくり、つない続けることの環境的・文化的価値を問い直し、循環型社会における人と森林の関係のサステナビリティを展望していきたい。

引用文献

- 石村真一 1997『桶・樽（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）』（ものと人間の文化史 82-1・82-2・82-3）、東京：法政大学出版局。
- エノス、R. 2021『「木」から迎える人類史—ヒトの深化と繁栄の秘密に迫る』水谷淳訳、東京：NHK出版。
- 小泉和子編 2000『桶と樽—脇役の日本史』東京：法政大学出版局。
- 松本純子 2021「絶滅寸前からの逆転！ 広がりを見せる木桶醤油」『日経ビジネス』2021年11月1日掲載。https://business.nikkei.com/atcl/gen/19/00266/102700007/?P=2（2022年10月11日閲覧）



木桶を用いた醤油の製造（2019年11月16日、和歌山県御坊市堀河屋野村、筆者撮影）